



## 第6部 京都先端科学大



たなか・かずひろ 名古屋大学院農学研究科林学専攻満期退学。農学博士。京都府立大教授などを経て2019年、京都先端科学大バイオ環境学部教授・学部長。専門は森林計画学、環境情報学。

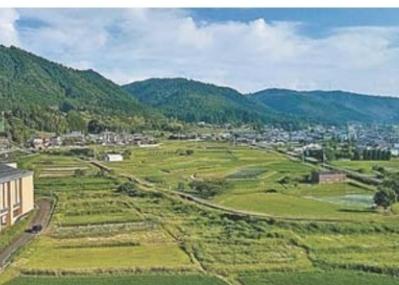
バイオ環境とは、人とともに多様な生き物が共生できる環境のことといいます。地球上には人間以外にも多様な生物が生息しており、それらの生物が複雑に連携し合って生態系を作っています。生態系のシステムは固定化されたものではなく、絶えず変化しながらも、全体としてはバランスが取れた安定な状態を保とうとしています。

しかし近年は、地球温暖化によると思われる気候変動の影響もあり、この安定

状態が大きく崩れようとしています。生物の生息環境が大きく変わり、病虫害が

田中 和博 バイオ環境学部長

龜岡は京都の近郊にあります。龜岡は京都の近郊にあります。自然が豊かな地域ながら、自然が豊かな地域の持続可能な社会を構築していくことが求められています。



006年に龜岡キャンパスに開設された比較的新しい学部です。設置当初は、京都議定書のことが意識され、かと心配されています。これからは、環境の変動に適応できる新しい生活様式や、新しい形の自然との共生を構築していかねばなりません。それぞれの地域が、風土の違いに合わせて、できる限り自立し、循環型の持続可能な社会を構築していくことが求められています。

006年に龜岡キャンパスに開設された比較的新しい学部です。設置当初は、京都議定書のことが意識され、かと心配されています。これからは、環境の変動に適応できる新しい生活様式や、新しい形の自然との共生を構築していかねばなりません。それぞれの地域が、風土の違いに合わせて、できる限り自立し、循環型の持続可能な社会を構築していくことが求められています。

できた「京都」の知恵や文化の特性を基礎にした、新しい形の自然との共生を目指しています。

たとえば、「物づくり」において経済的な効率性を追求するだけではなく、都市と近郊農村との関係性を活かした「事づくり」や、生物資源の有効利活用、新しい生活空間の環境デザインです。これらを「京都龜岡モデル」と呼び、自然との共生モデルとして世界に発信するとともに、留学生にはこのモデルを手本として持ち帰つてもらい、自国の風土に合わせて改良してほしいと願っています。

環境の変動に適応した新しい形での自然との共生、その課題を解決することがバイオ環境学の使命です。

IIおわり

## (12) バイオ環境学 自然との共生目指す